る。最近 R. M. Schuster (1958) は本種が葉の再生による無性生殖を行うことを，葉が比較的ちぎれ落ち易い性質から考えているが，今回の研究はこの Schuster の考えを支持するものであろう。すなわち葉辺の細胞および葉頂部の細胞に比較的再生力が強いことがわかつた。しかし自然状態においては本種の葉には再生的な無性芽等が発見されていないので，実際にこのような葉細胞の再生による無性的な方法が行われているかどうかはなお問題として残る[4]。

葉細胞の再生パターンは Fulford (1956) のいう *Nardia*-type である。また本種の葉辺に生ずる特殊な仮根と再生細胞との関係についてみると，仮根のない葉でも容易に再生することから，両者には直接的な関係がないといえる。仮根の原基細胞は最初は他の細胞と形態的には区別されないが，仮根分化が始まつていると neutral red で仮根原基細胞のみが染まる。染まる濃さは分化が進むほど濃くなる。一方再生細胞は分化を始めても染色されない。このようなことから仮根の原基細胞と再生細胞とは分化の初期に原形質内の生理的パターンの変化が全く異なる方向に起るものと考えられる。また葉辺の仮根は茎に生ずる仮根とその染色性その他の性質が同じであることから，茎の細胞と葉辺部の細胞との組織的分化は明確ではないということができると考えられる。

4) このことに関連したことであるが東京都の丹波村で採集した本種は茎の下部（比較的古い部分）にたくさんの小さな側枝を出しているものが多かつた。このような現象（これは茎からの再生と考えられる）も無性的なふえ方として有利な方法であろう。

○アゼスゲ節について（秋山茂雄）　Shigeo AKIYAMA: Adequate name for sect. Acutae of *Carex*.

本節は *Carex acuta* L. をふくみ，Section 名には古来 Acutae が用いられていた。それで筆者が "極東亜産スゲ属植物 1955" の原稿をかきだしたのは15年以上昔であつたので，つい Sect. Acutae を用いてしまつたのであるが，命名規約によりこれは Sect. Carex とすべきものであるので下記のように訂正させていただきます。

Carex (Typus: *Carex acuta* L.) Sect. **Carex**

Sect. Acutae Fries, Corp. Fl. Suec. 191 (1835).

Sect. 25. Acutae Akiyama, Car. Far East Reg. Asia: 71 (1955).

□吉川純幹：日本スゲ属植物図譜 (II) A5 pp. 139 図版 70

本書は本誌33巻2号で大井博士が紹介された第1巻の続巻で，タニガワスゲ他70種を図説し，図版の対照頁が説明になっている。すべて前記大井氏の紹介の通りである。いま両巻をあわせると140種のスゲが見られることになり更に続巻を合せば日本のスゲの大部分がわかることになるので続巻刊行のため更に努力するよう著者と発行者に期待する。

J. Yoshikawa: **Icones of Japanese Carex,** Vol.**2**. 139 pp. incl. 70 pls. (1958) Publ. by Hokuriku-no-Shokubutsu-no-Kai, c/o Botanical Institute, Faculty of Science, Kanazawa Japan.　　（久内清孝）